

すべての子どもが楽しく学ぶ国語の授業をめざして：
分かり方を支える学習環境のあり方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國松, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007255

すべての子どもが楽しく学ぶ国語の授業をめざして

－分かり方を支える学習環境のあり方－

國松 弘子

Japanese Language Lessons in which All Children Can Enjoyably Learn :
Environments that Support Learning
Hiroko KUNIMATSU

はじめに

本研究では、すべての子どもが楽しく学ぶために、学習科学の「人の分かり方」に着目し、よりよい学習環境について実習を通して考察する。なお、すべての子どもとは、通常学級における特別な教育ニーズのある子どもも対象にしてきた。国語嫌いや教え込み型授業を学習科学の知見をもとに改善を試みた結果、学習意欲や学びの質が高まる様子が見られた。また、気になる子の分かり方を理解することから、教師の学習観や障がい観の省察につながった。本文では、実践から得たことをもとに分かり方を支える学習環境のあり方について説明する。

1 問題の所在

(1) 国内外の調査にみる国語科の課題

経済協力開発機構（OECD）の生徒の学習到達度調査（PISA 調査）2009 の結果、我が国の生徒の読解力は改善傾向にある。しかし、過去の国内調査と同様、情報を関係付けて解釈することや自らの知識や経験との関連付けて述べることなどは課題として残っている。また、平成 22 年度全国学力・学習状況調査の静岡県分析では、正答率も無解答率も高いことから「確信がないと自分の考えを思いきって書けないのではないか」と指摘され「自分の考えを表明するのは、理解に至る過程における重要なステップであることを授業で意識させたい」としている。以上のことから、自分の考えをもつ過程を中心に、授業を根本的に見直す必要性を感じ始めた。

(2) 分かりやすい授業を問い直す

平成 19 年度から特別支援教育が始まり、通常学級における発達障がいのある子どもに配慮した分かりやすい授業が求められてきた。2011 年に公表された国立特別支援教育総合研究所の「小中学校における発達障がいのある子どもへの教科教育等の支援に関する研究」によると「教科のつまずきは障がいの有無に関わらず共通性が多い」とされ、授業改善はすべての子どもの分かり方を支えると確認できた。また、柘植氏によれば、特別支援と教科教育の融合をめざした、授業のユニバーサルデザインという考え方がすべての子どもの学びを保証するという風潮は問題である（柘植，2011）と指摘する。では、通常学級の担任ができる適切な支援とは、何なのであろうか。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究ではすべての子どもが楽しく学ぶ国語科の授業をめざして、学習科学の知見から、子どもの分かり方を支える学習環境のあり方について考察することを目的とする。また、通常学級における特別な教育ニーズのある子どもの学びにも着目し、効果的な支援についても考察する。

(2) 研究の方法

研究の方法はアクションリサーチである。実習校の教師と課題を共有し、さらに大学院での話し合いを通して進める。A小では、研修主任の学級で実習し、協調学習を取り入れた国語の授業づくりについて学び、B小では、通級指導教室に通う子どもがいる4年生に入り、連携の実態と支援のあり方について実践から考察する。実習は、平成23年4月から12月まで行う。

3 大学院での学び～学習観と障害観の転換

(1) 学習科学の知見から～子ども中心型授業への転換

人はいかに学ぶかの研究として、認知科学を背景とした学習科学がある。そこでは「人は自分のやり方をもっていて、他の考えを聞くことを通して、自分の考えを見直す」という知見から「協調学習 (collaborative learning)」が提唱されている (三宅, 2010)。協調学習とは、個人の理解やそのプロセスを他人と協調的に比較、吟味、修正する過程を経て、一人ひとりが理解を深化させる学習である。協調学習で得た知識は、活用できる知識となり、学んだ場以外に持ち運び可能、必要になったとき引き出し可能、作り変えつつ維持が可能という3つの性質をもつが、知識伝達型で得た知識は、はく落しやすい性質をもつという (三宅, 2010)。この知見は、子ども中心型授業への転換の是非を説明する。そして筆者が、すべての子どもの分かり方を支える学習環境を考える指針となり、そこから国語科の授業の分かる楽しさを検証する2つの視点が生まれた。

(2) 分かる楽しさのある授業を検証する2つの視点

① 視点1：活用できる知識を身に付ける学びのプロセスがあるか

学習科学は、日常生活で使える知識

を身に付けることを目指している。三宅らは、協調がうまく起きて学ぶ場合を詳しく調べ、学びのプロセスには、1から4のレベルがあることを示した。それによると、学校で身に付けさせたい知識は、レベル4が多く、それを「活用できる知識」として身に付けるには、レベル3で他人に自分の考えを話す (外化) ことが必要であるとする。従来の授業の課題である一部の意見交流で終わる

表1 学びのプロセス

理解レベル	科学の学びのプロセス	国語の学びのプロセス	例：大村はまの実践「生き生きと話す」
4 学校知	原理原則の習得	言語技術の習得 情緒力=物の見方感じ方が豊かな姿 論理的思考	考えた言葉を紹介する全体を一言で表す力、よい言葉使い、適切な敬語、推敲の力
3 外化	他人の考えを聞いた、他人に説明したりすることを通して、自分の経験則を捉えなおし、より抽象度の高い理論をつくる	他人の考えを聞いた、他人に説明したりすることを通して、自分の考えを捉えなおし、より抽象度の高い、或いは納得のいく考えをつくる	自分が考えた言葉を先生や友達に相談したり、読んでもらったりすることが自主的に起こる
2 経験則	何回も同じ経験をして「経験則」をつくる 経験のたびに確認して強化	「経験則」をつくる	作品の吹き出しを自分なりに考える。対話で引き出す
1 経験	一回経験して「分かる」	普段、授業の言語環境・読書で分かっていること	くりちゃんという会話が ない漫画と出合わせ、 おもしろさを味わう

ことやグループ学習の学びの質が問われてきたことと考え合わせると、対話の充実が、分かる楽しさにつながる鍵と思われた。そこで、大村はまの優れた実践「生き生きと語る」を参考に、その学びのプロセスを検討し、表1を作成した。大村の実践を見ると、学ぶ動機付け、他者との関わり、すべての子が納得するまで話すことができるなど、学習科学のさまざまな知見に即していた。このことは、協調学習を実現すれば、子ども中心型の授業に転換できる期待がもてた。これに対し、知識伝達型授業とは、レベル3の外化 (話す) がなく、レベル4を一方向的に伝達するとされる。この2つの授業の違いは、前節で述べたように得られた知識の質に表れ、前者の実践と

して三宅によるジグソー学習などがある。では、子ども同士で話していればよいのだろうか。分かるとはどういう状態かという新たな課題が浮かび上がってきた。

② 視点 2：教材が、人の分かるという仕組みに沿った単元構想になっているか

人が分かることについて「学びのドーナツ論」が提唱されている。(佐伯, 1995)。それによると「学び(分かる)は、学び手の自我(表記 I)が、共感的な他者(YOU と表記)とのかかわりを通じて本物の文化的実践が営まれている現実世界(THEY と表記)へと誘われ、そうした世界に参加していく行為であると捉えられる」とされ、それらをまとめると図 1 の通りである。教師は 2 つの接面で現実世界を子どもと共に見つめながら支援し、図 1 の I (子ども) を現実世界とつなぐ役目であるという。つまり、授業でただ話しているだけではだめで、図 1 のように、教師が、1 人ひとりを I から THEY

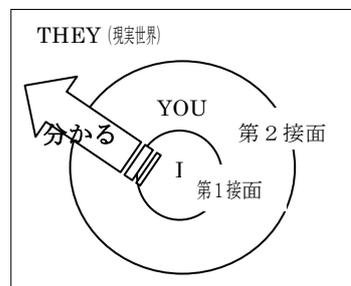


図 1 学びのドーナツ論

の世界へつなげるために、YOU (他者や教材) と出会わせ、I のもつ素朴な概念、経験と実生活をつなげる必要がある。すべての子どもの分かり方を支えるには、このような教材観や授業観の前提から生み出された学びがいのある課題によって、対話したくなるのではないかと考えられる。

(3) 障害観の転換

かつて、心身の障害は、個人の問題として考えられていた。しかし、近年では、国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health : ICF) の理念が主流となっている。ICF の理念とは、障害を個人因子だけでなく環境因子との相互作用によって生じるさまざまな活動への参加を妨げるバリアとしてとらえることから説明する点が新しい。例えば、個人因子として足に不自由がある場合、1 人では歩けないが、環境因子に車いす、バリアフリーの道が整えば、自由に動くことにつながる。つまり、環境が障害をつくる場合もある。これは、教室にいる発達障害の子どもの学びの環境をどう整えるかという視点につながった。

4 実践報告

本研究では、すべての子に発言の機会をつくり、学級の教える、教えられるという子どもの固定関係を打破するため、ジグソー学習を取り入れた。また、実生活とのつながりを考え、実践した単元をまとめると表 2 の通りである。ただし、実践 5 は、通級指導教室の実践である。

表 2 協調学習を取り入れた単元

実践	冊	単元名	視点	協調学習形態
1	6	宮沢賢治ワールドを味わおう I・II	1, 2	ジグソー
2	4	いろいろな読みもの	1	ジグソー
3	6	解説者になろう「鳥獣戯画を読む」	1, 2	特派員ジグソー
4	4	だれもがかかわりあえるように	1, 2	ジグソー
5	通級	お話探偵(全 5 回)	1	グループ

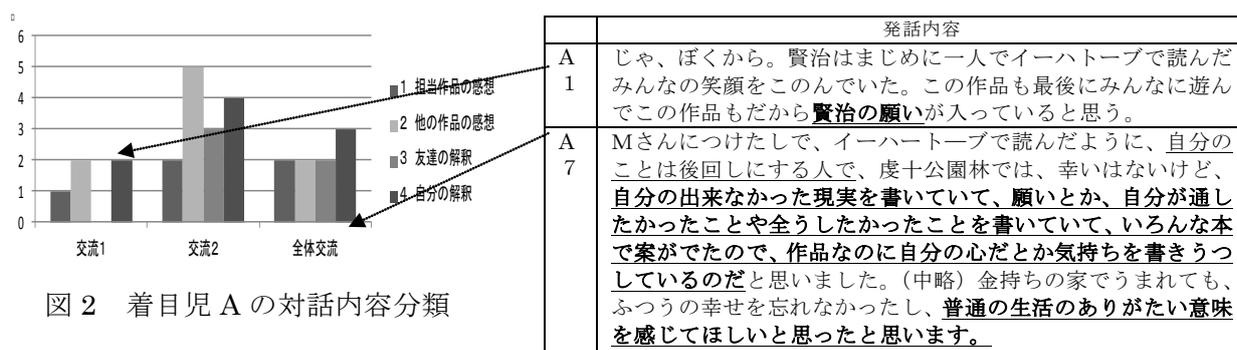
(1) 協調学習の推進と課題(実践 1 より)

①全員が目的をもって話す工夫

全員が目的をもって話すために、宮沢賢治作品を味わう視点を工夫した。まず、プレ教材「やまなし」では、印象深い場面、気になる表現、賢治の生き方や考え方を感ずる場面の 3 つの視点で読み深めた。次に、その視点を自己選択し、宮沢の他の 3 作品を読むときにも活用し、味わい深めることをめざした。ジグソー学習を取り入れた結果、全員が自分の考えを伝え合うことができた。着目児 A 子は「虔十公園林」から賢治の生き方を感ずる場面を読み深め交流した。発話内

容を4つに分類し、その変化をまとめたものが図2である。それによると、交流2から「2 他の作品の感想」と「4 解釈」が増加して、違う作品を読んだ他者との交流から学びを深めたことが分かる。詳しい発話は表3に示す。A子は、賢治の願いを物語に発見している。他者の考えと交流したことで考えが深まり、全体交流のA7には、賢治の願いを自分の解釈と合わせて詳しく表明した。この発話を校内研修で紹介すると、協調学習の効果や学びの質の高まりについての具体的理解につながることができた。

表3 Aの発話抜粋



	発話内容
A 1	じゃ、ぼくから。賢治はまじめに一人でイーハートブで読んだみんなの笑顔をこのんでいた。この作品も最後にみんなに遊んでこの作品もだから賢治の願いが入っていると思う。
A 7	Mさんにつけたしで、イーハートブで読んだように、自分のことは後回しにする人で、虔十公園林では、幸いはないけど、自分の出来なかった現実を書いていて、願いとか、自分が通しなかったことや全うしたかったことを書いていて、いろんな本で案がでたので、作品なのに自分の心だとか気持ちを書きうつしているのだと思いました。(中略)金持ちの家でうまれても、ふつうの幸せを忘れなかったし、普通の生活のありがたい意味を感じてほしいと思ったと思います。

② 気になる子の学びを支えた友達からの承認とジグソー学習による役割

もう一人の着目児B子は、支援員の支援も必要な子どもであったが、協調学習によって友達同士で学び合い、自分の考えを友達に認められることで考えを深めていく様子が見られた。学習アンケートには、B子が楽しかった理由として「少し話せたから」とあり、他者と分かりあう体験は、気になる子の学びを支え、ジグソー学習の役割は、やりがいを生み出し、意欲化への有効な手立てであると思われた。参観した先生方からは、子どもたちがよく話す質の高い授業であると評価の声がきかれる一方、ジグソー学習の課題を作る難しさが話題となった。

(2) 子どもの「分かり方」を育て、支える人的環境としての教師(実践4より)

① 多様な考えを出すための工夫

総合的な学習とタイアップした本単元は、目や耳が不自由な人のための工夫などを調べ、ジグソー学習を通して「だれもがよりよく関わりあえるためには～が大事」の「～」あてはまる言葉を考え、自分なりの福祉キャッチフレーズを作った。答えが一つではないオープンな課題であるため、すべての子が自分の考えを書くことができた。ところが、グループ学習のとき、教師が話し合いを整理しようとしただけで、子どもが教師に正誤を求める姿が見られた。オープンな課題であっても、子どもたちに「先生は正解を知っている人」という構図があると「先生に聞く＝分かる」と処理してしまい、自分で分かる過程を自ら止めてしまう姿が観察できた。分かり方を支えるには、この構図を壊し、子ども自身が納得するまで考えることに価値があると粘り強く働きかける必要性を感じた。授業での教師の言動や価値付けは、教師の学習観に基づいている。それは、子どもとの関わりを通して子どもたちの学習観の構築を担っていることが分かった。

(3) C子の分かり方を支える専門的な支援(実践5:通級指導教室)

B小のC子は、できない不安、離席、暴言などで、教室での国語学習が難しかった。しかし、通級指導教室では、教師との信頼関係のもと、自立活動や漢字などの学習ができていた。筆者は、教科の補充として週1回の指導時間のうち10分程度、読解指導を数回行った。「お話探偵」とい

う活動では、C子は主人公の気持ちを話したり、選んだりと進んで参加し、肯定的な即時評価を受けながら、落ち着いて課題をやりぬくことができた。このことから、集中できる環境を整えれば、C子も分かり方のプロセスによって学ぶことが分かった。C子の分かり方を支えるには、まずは、安定が必要であると伺った。通級指導教室の観察から主な指導をまとめると、注意集中の持続支援、学習支援、心の理論の構築支援の3つであった。この支援を生かし、C子も参加できる協調学習にするためには、C子だけ支援するのではなく、学習集団も育てる必要があった。

5 総合考察

すべての子が楽しく学ぶ国語の授業をめざし「協調学習」を積極的に取り入れ、分かり方を支える学習環境について分析してきた。それらの結果から考察したことを4つに分けて整理する。

(1) すべての子どもが楽しく学ぶ前提となることとは

子どもが分かるためには、自分の意見を表明する場において、自分と他人の考えとの差異に出会うことや分かりたいと聴き合う関係が必要であった。また、効果的な支援を整理すると、①授業内の支援、②授業外の支援に分けられた。①は、外化、自己決定、意欲化、他者とのつながり、個に応じた支援、②は、意欲化、個に応じた支援、対話であった。このことから、授業だからできる支援は、外化であった。また、協調学習ができない姿から、成立するまでに何が必要かを整理すると、図3の通りである。三宅によれば、「人はもともとどうまい学び方をもっているわけではない」とする(三宅, 2010)。従って、協調学習を行うことから、学び方を学び、学ぶことのよさを体験することが重要だと考える。



図3 協調学習を支えること

(2) 担任ができる特別支援とは

分かりやすい授業とは、通常学級の授業を特別支援が必要な子一人のために簡単にするというのではない。必要な支援は2つであり、参加支援と分かる支援に整理できた。前者は、障がい特性に配慮した学習の見通しや状況を本人に分かるように説明する参加への支援であり、後者は本時の核となる場で自分なりに思考し、分かるための支援である。また、分かる支援には、今ある力で何ができるのかという長所活用型の特別支援教育の視点から目標をたてる必要がある。そして、なぜできないのかではなく、どうつまづくのかという点から、分かり方を見取りたい。教科教育と特別支援教育の融合は、まだ始まったばかりである。従って、個の育ちを促す、2つの支援の効果的なあり方については、担任一人で判断せず、専門家との協働が必要である。このような意味から、すべての子どもが楽しく学ぶ学習環境を考えると、今までの学習環境を支えてきた教師の学習観や障害観の省察を余儀なくされ、現状を受け止め、支援の効果を得るためにも、子ども中心の授業観と新しい障害観への刷新が必要ではないかと考えるに至った。

(3) 子どもも教師も学べたジグソー学習の実践～授業、授業化への意欲が引き出されたこと

ジグソー学習法は、全員に考えの外化の必要感と見直しの機会を確実に保証でき、読書教材での学びの実感も示された。この学習を経験した子どものアンケートには、支援の必要なAも「人の話を聞くと自分の考え以外のこともいっぱい見つかった」と述べている。また、協調学習の子ども対話の質を可視化して伝えた研修後の教師アンケートでは、授業化の意欲が高く、研修意欲

の高まりがみられた。これは、実習校の先生方の課題意識にも関連するが、ジグソー学習の研修への導入は、学習観や障がい観の省察の場につながる可能性が示された。

(4) 分かり方を支える視点から学習環境のあり方を問い直す

分かり方を支えるという視点から従来の学習環境の見直すと、すべての子どもが楽しく学ぶ子ども中心の授業の重要性が確認できた。教室に知識伝達型の構図があると、学習集団に「分かる」という状態の勘違いが起こる。それを避ける一助となるのが、特別なニーズをもった子どもへの支援を考え、問題を関係性の中で捉える新しい障がい観である。また、特別支援教育と認知科学に詳しい専門家は、学びにデリケートな自閉症の子どもにこそ、教え込み型ではない発見型の教育が重要であると述べている（渡辺，2005）。担任や学校風土がもつ、一人ひとりの分かり方が違うという学習観と、障がいは個の問題のみに帰結せず関係性から捉えるという新しい障がい観は、一斉画一の固定化された教室空間を刷新できると考えている。これらを通級指導教室との連携と協働を含めてまとめると図4の通りである。図4の中央の分かり方を支えるのは、左側の学習観をもとにした手立てと右側の障がい観をもとにした通級指導教室の指導である。典型発達の子どものは、分かるプロセスを順に進むが、特別な教育ニーズをもつ子どもは、分かる

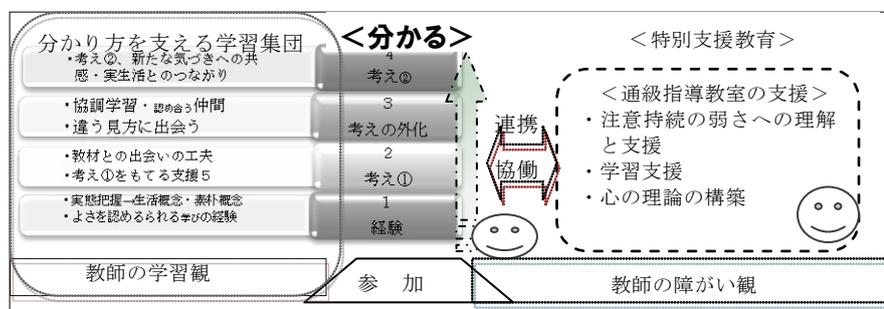


図4 子どもの分かり方を支える学習環境の構図

プロセスに、主に3つの理解と支援が適切な支援タイミングで行われて分かるに向かう。また、気になる子がよりよく学ぶには、うまい学び方（協調学習）ができる人的環境が大きな支えになる。筆者は、すべての子が楽しく学ぶ教室は、未来の共生社会につながると思う。今後も、分かり方の違いを生かした協調学習を推進し、本当に分かる楽しさを子どもに伝えていきたい。

おわりに

現代の社会は、経済、地球環境、情報化などの急激な変化から価値観が多様化している。こうした社会をよりよく生きるには、自ら課題を見つけ、他者とともに協同的に学び、適切な道具を使いながら学び続ける資質がますます重要視される。今後の取り組みとしては、校内研修で協調学習を推進し、学習科学の知見にもとづいた授業検討、分析を共有し、授業改善につなげたいと考えている。また、すべての子どもが楽しく学ぶ土台となる教師の観を省察する策として、担任が気になる子の分かり方を可視化して理解し、支援する過程を通して、観を深めていきたい。

主要参考文献

佐伯胖（1995）『子どもと教育 「学ぶ」ということの意味』岩波書店。
 三宅なほみ（2010）「協調的な学び」佐伯胖編『学びの認知科学事典』大修館書店。pp.459-47
 渡部信一（2005）『ロボット化する子どもたち』大修館書店。
 柘植雅義（2011）特別支援教育研究 12月号 授業のユニバーサルデザイン巻頭論項 東洋館出版社。